

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

海外ニュース	1
委員会報告<文化厚生委員会>ほか	2
新・パソコン外論考(其29)	3
出版文化史逍遙(71) 洋書の歴史雑記帳(XXVI)	4
一人の着想が万人へ	5
スコットランド紀行	6



海外ニュース

◆ ジェーン・オースティンの初版本

ジェーン・オースティン『高慢と偏見』初版本がコレクターにより62,500ドルで落札された。この初版本は、スコットランドの古城で偶然発見されたもので、この落札価格はオースティンとしては最高額。本は、グラスゴーの南西Ayrshireにある小さな城で、所有者が引越しのため荷造りをしていて見つけたもの。1813年に出版された三巻本の価値は約18,700ドルと見積もられたが、その3倍もの値がついたことに、エディンバラのオークション会社Lyon and Turnbullは驚いている。

Authorlink Publishing News AUG 1-15,2002

◆ 7月は困難な月

— 夏の書店売上伸び悩み

7月はすべての小売業者にとって「困難な月」で、Barnes & Nobleの報告では同社スーパー書店チェーンでの売上は僅か0.2%しか伸びず、第2四半期(5月～7月)でも伸び悩み率は0.3%だったとのこと。今年前半の売上でも、同社による修正予測では1%から2%の伸びが見込まれたにもかかわらず、実際の伸び率は1.4%だった。小売業者各社でも、前半6ヶ月で2～3%の伸び率を見込んでいた。Daltonの売上高は7月に4.5%落ち込んでいる。売上は微減だったが、B&Nによるとこの時期の業績全体はほぼ予測通りだ

ったとのこと。B&Nによる7月ベストセラー・タイトルには、A Love of My Own (ロマンス詳説)、Dr. Atkins' New Diet Revolution (ダイエット本)、Conquer the Crash (投資関連本)、What Went Wrong at Enron (エンロン疑惑関連本)、そしてManias, Panics and Crashes (株式市場関連本)などがある。

PW Daily AUG 8,2002

◆ Kluwer Academic Publishers買収への
オファー

Wolters Kluwerは、その学術系出版部門であるKluwer Academic Publishers (年間売上高1億ポンド)の買収オファーを受けている。何社かのベンチャー投資会社のほか、John Wiley、Reed、Taylor & Francisなどの出版社が買収に興味を持っていると思われる。Kluwerは、コンテンツ、コンピュータ・ソフトウェア、およびその関連サービスを目指した情報系出版社へ経営の重心を移そうとしている。同社売上高は、2002年1月～6月の6ヶ月間で19億ユーロ(12億ポンド)にのぼり、そのうち1億7千ユーロ(1億600万ポンド)を上記コア事業以外が占める。「これらの事業は、今後資金化されるか整理される予定」と同社は述べている。Kluwerは現在、オランダ国内のトレード系出版社ten Hagen & Stamを売却するための交渉を行っている。利子、課税、減価償却、および減債基金など処理以前の収益は3.3%アップの4億800万ユーロ(2億5,500万ポンド)、EBITDAマージンは18.1%であった。インターネット商品を含む電子商取引による売上も、今年前半で29%増の6億700万ユーロ(3億7,900万ポンド)にのぼった。

theBookseller.com AUG 13,2002

第41回 麻雀大会

2002年9月6日(金)
於・麻雀クラブ東久

恒例の麻雀大会も数えて第41回、20名の雀士が東京駅八重洲口近くの雀荘に集まり3時間の熱戦を繰り広げました。結果は下記のとおりでした。

優勝 西野久雄（三友社） +95
準優勝 須賀 豊（ワタナベ流通） +77
第3位 西山孝児（西山洋書） +26
第5位 松浦拓己（丸善） +23
BB賞 上原鉄男（友隣社）その他敢闘賞／大波／
小波賞／当月賞／当日賞等々多数（受賞者名省略）

優勝の西野氏は、「つきがあった事と、メンバーに恵まれた結果でした」と控えめのスピーチでした。

幹事 村山（ゲート書房）記

Frankfurt Book Fair

2002年のFrankfurt Book Fairは10月9日～14日に開催されます。今年を中心テーマは“Bridges for a World Divided”－分裂に瀕した世界に架け橋を－でしょうか。また、招待国はリトアニア（Lithuania）、ソ連邦崩壊後独立を果たしたバルト3国の一つ、とは判りますが地理的にも商売上も遠い国、何をどのようにアピールしてくるのか一寸興味がわきます。

今年のフェアでは当協会皆川理事（広報委員会副委員長）に、パンフレット「Invitation to JAIP」を直接主要出版社に配付していただくことになりました。広報活動の一環として、出版文化国際交流会のご協力のもと、同交流会ブースを拠点に行います。なお、交流会ブースにパンフレットを常備していただいていますので、会員各社におかれましても今フェアにお出向きの折にはお取引先への配付等にご協力いただければ幸いです。【交流会ブース：6.0 E932】

丸の内に新名所



9月6日に「二代目」丸ビルが開館しました。かつてロンドンの金融街・ロンバード街を模して計画されたという丸の内界限は、今や銀座と結んだ大ショッピング・モールに変身しつつあります。旧丸ビルは日本のビジネスのシンボリック存在であり、ダムの水量などを計る「升」の役目まで負わされていましたが、「二代目」はどんな役割を演じることになるのでしょうか。「家賃は高いけれど、長いお付き合いのお客様の便を考えると丸の内からは離れられません」と11階の新事務所に戻られた㈱ゲート書房・村山社長。最近本郷内で事務所を移られたアカデミア・ミュージック㈱の平岩社長も同じことをおっしゃっていました。お客様を先ず大切に。大先輩のお話に重みを感じました。

新・パソコン外論考 (其29)

宇田川一彦

◆I'll never be the same／昔と違うのに！

子曰、人之生也直、罔之生也、幸而免、

The Master said, "That a man who lives is because he is straight. That a man who dupes others survives is because he has been fortunate enough to be spared."

(論語／雍也篇・Confucius ; The Analects / Book VI)

【超拙意識：先生が、言われた。本来、人生というのは、真っすぐなものだよ。人を欺いて生きている者は、偶さかの僥倖で、助かっているだけのことだよ。】

★Internetについて【博物館番外編4】

前号の続きです。地下鉄で、ホテル（在；尖沙咀）から2つ目油麻地駅にある、東華三院文物館（Tung Wah Museum/website;tungwah.org.hk）。当館の前身は、1911年に開院した廣華医院大堂。当初は、グラウンドフロアのみ（1階建て）でしたが、ベッド増設要望に応じて1919～20年にかけて2階建てに改築されたものです。1873年の東華医院の微信録（収支状況記録とドナー名とその処置記録）や1931年の東華免費小学校の卒業証書など一見の価値あり。また、建物がユニーク、伝統的な中国風建築と西洋のヴィクトリア朝の融合した、第一級の歴史的建築物です。（Free Admission;免費入場）

香港医学博物館（Hong Kong Museum of Medical Sciences/website:hkmsms.org.hk）免費入場Free Admission、1996年開館。香港における健康科学、薬学の歴史、発展、未来に関する展示が、3層11室で観られます。なかでも、小牛ワクチン接種台（Calf Vaccinating Table）と天然痘（Smallpox）用ワクチン製造機の展示を見たとき、かつてのニュースを思い出しました。中国薬学と西洋薬学と交点を見届けている建物は、非常に美しいエドワード様式のもので。これも、必見。香港に行ったら、ここはなにがなんでも立ち寄りたい「骨董屋」（Teresa Coleman Fine Arts Ltd. 因みに英国婦人経営の店。国宝級・インディゴブルーの非正装用ローブを見に行き、手も足も、口もでない値段でしたが・・・。目の保養に）のあるハリウッドロードから山の方へ2筋上の所にあります。

（免費入場）

警隊博物館（Police Museum/website:info.gov.hk/police/english/museum/2-6-1.htm）free ad. 前身は、1964年の「警察歴史紀錄委員会」です。本館は、1988年にワンチャイギャップ警察署が、ワンチャイ湾の方に移動したので、その後を活用したものです。4つのgalleryで構成され、Orientation/Narcotics（麻薬）/Triad Societies（暴力団組織）/Current Exhibitionに分けられています。筆者が気に入ったのは、1960年代に香港警察で使用されていた「Triumph」のサイドカー。ヴィクトリア山頂見物ついでにお勧め。（免費入場）

以上が、香港旅行の際に立ち寄った博物館です。

偶然ですが、筆者の訪れた9館は、すべて「入館無料」であった、ということに気がきました。翻って、わが国の博物館の入館料は、声も出ないことに気がきました。

★Internetについて

8月下旬から1週間ほど、はじめて青森市に、博物館の取材で、出かけました。「三内丸山遺跡」の取材がメインです。また、久しぶりに弟妹との再会も楽しみでした。じつは妹が、2か月ほど前に学会で上京した折、衝動買いをして持ち帰った「iMac（OSは、最新のMacOSX-Tenと発音）」の件でSOSの連絡が入っていたことも青森行きの要因でした。Internetの接続ができないということでしたので、原因をリストアップしました。現在、メインで使用しているノートパソコン、OSはWin98で、電話接続関係は3年ほど前に購入したFLET'S ISDN用のTA（ターミナル・アダプター／Termnal Adapter＝インターフェイス変換装置）で、Internetに接続しています。問題はこのTAが、Winの98SE/Me/2000/XPやMacOSXに対応していないことが判明。約18,000円也を投げWinXPおよびMacOS9.2/X対応の「最新型TA」を購入、持参しました。しかし、iMacの内蔵OS9.2とXのいずれを使ってもproviderの所まで繋がらないのです。半日格闘しましたが、駄目なものはダメでした。原因は不明。新しいiMacでInternetにアクセスしない。ノートパソコン（Win98）で古いTAでInternetを行う分には問題ないので、「前のママ」にして帰京しました。気分は優れませんが・・・。（以下次号。乞ご期待）

洋書の歴史雑記帳〔XXVI〕高野長英と洋書(7)

鈴木 陽 二

◆長英の逃亡と蘭書翻訳 (2)

宇和島藩は、海上交通の要衝豊後水道を望む10万石の中藩だった。八代藩主伊達宗城の実父山口直勝は3千石の旗本で、渡辺華山の門人だった。開明的な父の薫陶を受けて育った宗城は、藩主となって西洋の先進文化に強い関心を抱いて開国論に傾き、同時に海防や軍事組織の改革に傾注し、幕末四賢侯の一人といわれた。高島秋帆の蔵書が幕府に没収されたことを知った宗城はその借用を幕府に願い出て、『サハル フルステルキングスキュンスト』（築城術原理）、『フルカール デ フラーゲン』（野戦塹壕問答）、『ドイツ ケル タクチークテルテリワーペンス』（三兵戦術書）を借用し、続けて10冊程度の蘭書（ほとんど兵書）を借り出して筆写させている。また幕府以外でも、大量の蘭書を所蔵していた佐賀藩主鍋島公から砲術書や火薬書など6点の蘭書を借用している。宗城がいかに海防や強兵に心を砕いていたかが理解できる。

宗城はこのような多くの蘭書を所蔵したが、藩中に蘭書を翻訳できる蘭学者がいなかった。高野長英の経世の書『夢物語』に接して深く感服し、脱獄中の長英から西洋の先進的知識の摂取を図るとともに蘭書の翻訳に当たらせるため、密に宇和島への招聘を企てた。その打診を受けたころ、長英は宗城に対して西洋諸国の軍事・財政事情を解説し、国防を論じた『知彼一助』と『訳業必要之書籍目録』を提出した。後者は、洋書類の購入を求めたもので、それには、蘭英独仏各国語の辞書・語学書類14点、兵書類15点が掲載されている。兵書の中には、当時まだ日本に輸入されていなかった洋書も数点挙げている。これを見ると、長英の学識の深さに驚くと同時に、いかに宇和島での訳業に強い希望を抱いていたかが感じ取れる。

1848（嘉永元年）に宇和島に赴いた長英は4人扶持を支給され、宇和島藩最初の蘭学塾「五岳堂」を開いた。宗城の蘭学振興政策はさらに進み、後年、1853（嘉永6年）には村田蔵六（大村益次郎）に扶持を与え、藩士の蘭学教育や藩の軍事研究に当たらせた。卯之町の二宮敬作のもとで医学を修行中のシーボルトの娘イネも、彼にオランダ語を学ぶために、険しい法華津峠を越えて宇和島に通ったという。二宮敬作はシーボルト事件に連座して長崎追放になり、故郷卯之町で

開業し、医療活動や藩の希望者に蘭学を教えた。

「百年、二百年といった町屋が文字通り櫛比して、二百メートルほどの道路の両側にならんでいる」と司馬遼太郎が記した卯之町は、予讃線の特急で20分ほどにある町だが、昔はこの間を峻険な法華津峠が遮り、人々はこの峠を越えて地の果てに赴くように城下町宇和島に行った。卯之町は司馬遼太郎が記したように今でも古い江戸時代の面影を色濃く残し、通りには塵一つ見られない清潔感にあふれた町である。明治5年に開校の「開明学校」では、明治15年の築造という現存最古の小学校建築を見せてくれるし、向背の山の中腹には、柱を一本も使わない百間廊下のある珍しい構造の旧宇和小学校、また高野長英が隠れ住んだ家、ここにはシーボルトの娘イネも暮らしたが、これら歴史的な建造物や史跡が残されていて、歴史の刻まれた珠玉のような町である。

さて、長英は藩主所蔵の兵書の翻訳を命じられ、宇和島滞在中に『西洋歩兵教練法 図解』『砲家必読』『デケル三兵タクチーキ』『新制鉄砲鋳法』『旁訳洋文解』などを訳して提出した。後年、村田蔵六は『砲家必読』を参照して住吉台場を築造したという。かねてから大砲製造を進め、砲術修行のため藩士を他藩に派遣したり、砲台の構築に着手していた藩では、長英の設計で、幕末の代表的な砲台の一つになる天嶺鼻砲台を1850（嘉永3年）に築造した。

宇和島滞在一年ほど経って、幕府の探索が同藩にも及ぶ形勢となり、長英は嘉永2年に宇和島を去る。そして琴平の金毘羅宮に参拝して広島に渡る。その後再び卯之町に現れ、程なく名古屋に赴き一カ月ほど留まった後、顔を焼いて江戸に潜入し、嘉永3年10月に江戸青山で捕吏に襲われ自刃して果てる。享年47歳だった。後日談になるが、明治31年に彼の近代化に果たした功業にたいして正四位が追贈され、明治32年には記念碑建立に御内帑金百円が下賜された。

長英自刃の3年後の1853（嘉永6年）にペリーが浦賀に現れ、日本は一瀉千里に開国に向けて進むことになるが、それを思うと、彼の先駆的な業績の偉大さと、それだけに不運だった生涯に感慨を覚えてならない。〔佐藤昌介『洋学史の研究』／高野長運『高野長英傳』／『高野長英全集』（元丸善・本の図書館長）

やや大げさな題であるが、筆者の経験から述べてみたい。前任校に勤務していた7年間のうち、最後の2年間は図書館長の務めを果たさなければならなかった。「毎週月曜の昼30分間だけマンデー・ミーティングを開きましょう」と提案し、図書館勤務の事務職員との集まりを持つことにした。教員と事務職員との意思疎通などに役立ったが、それだけでなく、教員側からは生まれないアイデアが事務職員の間から出たことを述べておきたい。

大学教員は、研究、教育、公務の3つが求められるが、研究面では「紀要論文」に執筆という機会が与えられる。大学発行の紀要論文集に掲載されるとそれが他大学にも送られるので研究成果が広く公開されることになる。その上、執筆者自身が書いた部分は抜き刷りの形で、数十部手元に無料でいただけるので、恩師や先輩に配ることができる。紀要論文の執筆は雑誌などへの投稿と違って枚数制限がゆるやかで、比較的自由に書けるので、業績が広く認められるよい機会でもある。

事務職員の方たちは、教員の公務にはサポートをよくしてくれるものである。ある時、紀要論文の表紙が話題になった。そのとき、もう60歳を過ぎておられる事務職員の荒蒔さんは「先生方が紀要論文は心血を注いでお書きになっておられるのに紀要論文の表紙はいかに貧弱ですね。どこの大学の紀要論文の表紙も一様にくすんだ色で平凡ですね。もっと中身に相応しい表紙にすべきじゃないでしょうか。」と言われた。早速、表紙のサンプルを用意してくれるように依頼したところ、一週間後にデザインのモデルを持ってこられた。それは静寂の森をイメージさせるような濃淡様々な重なりのあるデザインであった。またデザインは同じでも、茶、緑、青の3種があったので、図書館運営委員会と教授会でそのうちどの色が一番好ましいか同った。その結果、緑が一番いいということでそれに決めた。

論文を書くときは理路整然と首尾一貫性を重視しながらすすめるが、完成するまでは森の中を彷徨うような感じである。しかし一旦出来上がると森の中の清涼さと森林浴を楽しめるような感じになる。筆者はこの表紙を考え出してくれた荒蒔さんに感謝すると共に、UCLAで知り合ったニーナ・ワインシュタインさんと

共同作成した英語学習教材、『シアトルの郊外、Kirklandの森』（いばらき印刷）の英語教材の表紙にも使わせていただいた。

60歳定年を主張する背景は財政的な理由で、年輩者を1人辞めさせれば、その人の給料で若い人を2人備えるという単純な発想である。荒蒔さんのような人は停年後も働いてもらいたいと思っていたが、日本人の悪い癖で、例外を認めようとせず、一律均等にしたがる傾向が強い。これでは日本は活性化せず、創造性などは高まらないのではと心配である。定年の年を迎えると、例外なしに一律退職させたがるが、若手がまだ十分育っていない場合は例外を認めるべきではないかと考えている。

人様々であり、60歳を超えてから花開く人もいるし、ますます元気で活躍する人も少なくない。しかし、学者・教育者の世界でも頭を使っている人は年齢と共にますます冴えておられるようだ。少子化時代にある私たちは、若い女性により多くの出産を期待すると同時に、シニアの人たちにもそれぞれの個性に応じた人生を楽しく有意義なものになるよう頑張ってもらいたいものだ。サンフランシスコ

には65歳から入学する大学があるが、いっそのこと定年のない大学などあればよいと時々思う。

また、英語の学習にも個人個人が工夫する余地がある。前に、小学館ホームパルの先生方が中心になって開いていた「早期英語教育研究会」では、家庭の主婦の方々の教材作りの創意・工夫に大変印象づけられた。牛乳パックからサイコロを作り、数を教えるのに役立っている人もいたし、厚手の紙を使って簡単な口形図を作り、[1]の舌の位置を分かりやすく説明するのに使われている主婦の方もおられた。

最近、静岡に「英語の授業を面白くする研究会」があることを知った。子供はチャレンジするときに脳が活性化する。その会では様々な先生方のアイデアが生かされ、毎年それが積み重ねられて来たそうである。筆者はそのような会に出席し、自分のアイデアを伝えたいと思っている。例えばfiveの発音記号をカナで「ファイヴ」と書くところを「**ウ**ファイヴ」としたり、川柳で英語の特徴を詠んだりしたいものだ。

(聖徳大学教授)

一人の着想が万人へ

島岡 丘

スコットランド紀行

数年前に定年退職した伊藤二悦夫妻を誘って、2家族四人でレンタカーを一台借り半ヵ月ほどスコットランドへドライブ旅行に出かけた。四人いると旅の目的も様々で、景色を見たい、古城や庭園を見たい、モル

ツと地ビールを飲みたい、ゴルフもしたい、関連書籍でお世話になったアダム・スミスさんやD.ヒュームさんなどの旧跡を訪ねたいなど沢山の目的をもって出発した。

B & B

スコットランドではB & Bが充実している。スコットランド観光局は、品質で格付けを行っており、3ツ星・4ツ星ならほぼ間違いない。しかもインターネットで価格、部屋数、設備、行き方、予約などすべて日本からでも解決できるので便利である。B & Bは朝食



と宿泊だけの提供だから、来客の好きな主婦ならば、小さな子供がいても、少々老齢でも、家事の片手間で十分やって行ける。だから

どのB & Bも個性的で、まるで友人宅に泊まるようで、それぞれに旅の思い出を一杯作ってくれる。例えばグラスゴーから25マイルのB & B、East Lochhead。Andersons家は25エーカー（約10町歩）の牧場を所有し、Rossは牧場の経営と2エーカー（約2500坪）の庭園の手入れ、Janetは数々の賞を獲った料理の名手、ダイニング・ルームからは遠くにBarr湖が見え、絵に描いた以上に美しい庭園が大きな窓一杯に広がり、目の前の菜園からの野菜やハーブ、自前の牧場からの羊や牛を出してくれた。スカイ島のMrs.Robertsonはゲールを話す。小学生で下から二番目の娘さんは、ゲール語―日本語交換特別クラスに出席、そこで勉強した学習ノートや写真を見せてくれた。一番下の娘も姉さんに教わって、日本語で「いち、にい、・・・じゅう」が数えられる。ここも牧場があり、我々の行き帰りには白い馬が首を伸ばして出迎えてくれる。Mr.Robertsonは町の救急車の運転手。救急車を通勤に使っているのには驚いた。

エディンバラ

エディンバラのold townは15－17世紀の建物と町並みがそのまま残っている。エディンバラ城が中心にあり、巨大な岩山に聳え数々の伝説と歴史が刻まれている。その前の通りロイヤル・マイルに、Encyclopaedia Britannicaを1768－71年に刊行した出版社跡が残っていた。編集者のW.Smillieがこんな所で感慨もひとしお。少し右



に折れるとD.Humeが図書館長をしていた弁護士協会図書館（現在はスコットランド国立図書館）があった。キャノンゲート教会にはアダム・スミスの墓がある。「国富論」「道徳感情論」の著作名が墓標に記されていた。New Townに足を伸ばし、1831年開店の世界最古のデパートJennersを横目にDavid Humeの旧居を探すが、今は彼を記念して名付けられたSt David Streetの通りがあるだけ。その近くに歴史的なパブCafe Royalがあった。我々の座った席が映画「炎のランナー」（アカデミー賞受賞）の撮影にも使われたと、美人のウェイトレスに教えられた。ステンドグラスの美しい洒落たパブだった。料理にも満足。

ドライブ旅行

スコットランド（英国）の道路は左側通行、車は右ハンドル、日本と同じなので安心してドライブが楽しめる。交差点は日本のような信号でなくロータリー方式のroundaboutが多く、慣れるまでは戸惑うことが多い。辺鄙な田舎に行くと狭い一本道も多いが、passing wayと書かれた退避路は完備されている。中年の女性はまず退避路で待つ事なくどんどんやって来るので、こちらがpassing wayで待機し鄭重にお迎えする。お年寄り（多い）は100メートルも先で待ってくれるので鄭重にお礼を言って先に行かせてもらう。若い人は臨機応



変、格好良く挨拶をしながら通り過ぎて行く。こんなちょっとした挨拶もなかなか面白い。急な坂道で前方が全く見えなところはblind summitの標識がある。頂上で鉢合わせの可能性があるので、前方から車が来ないかを耳をそばだてそろりそろりと頂上を越える、と同時に眼も覚めるような風景にでくわしたりする。羊や牛の群れに道路を塞がれて立ち往生する事も多い。スコットランドのドライブコースは、その景観は世界でも1、2を争うほど素晴らしい。"Michelin"の道路地図がドライブの最良の友となる。景色の良いドライブコースscenic routeは緑色で示されている。コース選びはMichelinさんの命ずるままで、ほぼ当たり外れがない。眺めの良いところは、panorama, viewpointの印しが地図に示されている。そこで車を止めれば景観が楽しめる。

モルト・ウイスキーと地ビール

一行のうち、3人はお酒大好きで、自動車の運転もする。順番に一人が犠牲になり残りは昼からパブが楽しめる。

アバディーンからグラントウン・オン・スペイに行く途上、ロイヤル・ファミリーが夏の休暇を過ごすバラモラル城のところで反対側に折れたところにあるロイヤル・ロッホナガー蒸留所を見学した。1846年創業、1848年にヴィクトリア女王の訪問を受け、王室御用達となりロイヤルが冠された。なお、ロッホナガ



ーLochnagarのLochは湖のlochではなくバラモラルに聳える標高1155mの山の名前である。見学を終えて、“蒸留所の水”で割って味わったロイヤル・ロッホナガーの美味しかったこと。ほんのりと甘く、香りが豊に広がり、最後までスムーズな味わいであった。典型的な東部ハイランドのモルトを堪能した。グラントウン・オン・スペイでは、数百種類のモルト・ウイスキーのコレクションを持つCoppice Hotelのパブに行き、地元のスペイサイド・モルト"Balmenach 1972年"を頂いた。少し甘く、スモーキーでドライそんなお酒であった。エディンバラではグレンキンチー、スカイ島ではタリスカー、フォート・ウィリアムスではベン・ネヴィスなど地元で地元の水で飲むモルトの味は格別であった。

ビールは、全国ブランドのラガーと地酒のエールとビターがあって。どれも甲乙つけ難い。伊藤夫人はラガー、伊藤さんはビター、僕はエールが美味しいと思った。やはり造りたてのビールは何物にも代えられない。

月の世界にきたようなハイランドの景色、マクベスやハムレットの古城、自然を十二分に生かした庭園、ゴルフなどを楽しみ、スコットランドの旅は終わりました。

池田篤治（樺東書店）

ナノテクノロジー百科事典

待望の世界初ナノテクノロジー専門百科事典が
いよいよ2003年3月にリリースされます。
大幅割引にて予約注文承り中!!

Encyclopedia of NANOSCIENCE and NANOTECHNOLOGY

10-Volume Set (PrintまたはOnlineで提供)

著者: Dr. Hari Singh Nalwa (J. of Nanoscience and Nanotechnology誌の著者)

2003年3月刊行予定. 全10巻 トータル約6,000頁 400章収録

ISBN: 1-58883-001-2

予約特別価格 ¥720,000

(2003年3月20日まで)

本書(エンサイクロペディア)は、世界中25ヶ国から2000人を越える各専門の研究者がナノサイエンスとナノテクノロジー分野において、過去20年の成果を執筆しております。内容はナノ創生期から現在に至るまでの各時期における最新の資料、文献を数百の学術誌から精選し、タイムリーに紹介しています。数千にのぼる図表、写真、目次、化学構造式、数式は見ごたえがあります。

研究者、専門家に限らず学生、一般の読者に至る誰もが、自然にナノの全容を理解し、最新情報を把握できるタッチで編集されています。読み物としても充分期待に応えられる内容です。

主要収録章は以下の通りです

- ★ Nanocomposites, Nanoparticles, Nanocrystalline Materials, Nanoclusters and Nanocrystals
- ★ Superlattices, Quantum Dots, Molecular and Nanowires, Nanoscale Thin Films, Nanoporous Systems
- ★ Hybrid Materials, Colloids, Alloys, Nanoceramics, Self-Assembled Monolayers and Multilayers
- ★ Nanoelectronics, Nano-optics, Nanophysics, Nano-integration, Quantum Optics, Nanomagnetism
- ★ Fullerenes, Nanotubes, Nanorods, Molecular Wires, Molecular Nanotechnology
- ★ Supramolecules, Dendrimers, Self-Assemblies, Low-dimension Structures, Polymers
- ★ Structure Analysis at Atomic, Molecular and Nanometer range
- ★ Atomic Manipulation, Computational Nanotechnology, Molecular Nanoscience
- ★ Nanorobotics, Nanomechanics, Nanotribology, Nanofluidics
- ★ Applications in LEDs, Displays, Solar Cells, Batteries, Lithography, Catalysis, Memories, Coatings
- ★ Nanobiotechnology, Nanobiology, Nanomedicines, Drug delivery, Biomedical Applications

(American Scientific Publishers)

『関連出版誌』 *Journal of Nanoscience and Nanotechnology* (2001年創刊、年6回刊)

☆ご注文、お問い合わせ等は弊社商品セールスグループまで。(表示価格は税別です)

〈日本総代理店〉

ユサコ株式会社
商品セールスグループ

〒106-0044 東京都港区東麻布2丁目17番12号
Tel: 03 (3505) 3257 Fax: 03 (3505) 6283
E-Mail: e-media@usaco.co.jp